様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２５３９

研究課題名（和文）対音資料による近代漢語音韻史の研究

研究課題名（英文）A study of Middle Chinese phonological history by paired speech materials

研究代表者
岩田　憲幸（IWATA, NORIYUKI）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：９０１７６５５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：近代漢語は中古漢語から発展し、やがて現代漢語へと変遷する。本研究では、元・明・清時代における対音資料を利用し、それらの資料が反映する音韻体系を正確に把握することにつとめた。日本の江戸期には唐話がつたわり、唐話をおしえるための教本がつくられた。唐話は明・清期の漢語を反映するもので、近代漢語音韻史の研究にとって有用である。なお、本報告書にいう「漢語」とは「漢民族の言語」という意味であり、通常いうところの中国語をさす。「唐話」とは「唐」の「ことば」ということであり、やはり中国語の意味である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代漢語史研究においてもっとも重要な地位をしめる語音史の研究は、従来、主として韻書・韻図にたよっておこなわれてきた。だがこれらの資料がつたえるのは音類レベルの情報であり、音価レベルにおける情報をえるには限界がある。本研究では、パスパ文字資料・朝鮮文字資料・唐音資料・欧文資料といった音価レベルの情報を反映する対音資料について、共時論・通時論両面から音韻分析と考察を加え、その結果を従来の韻書・韻図による研究成果と照合することで、漢語音韻史研究にあらたな局面をひらくことをめざした。

研究成果の概要（英文）：Middle-Chinese has evolved from Ancient-Chinese, and is in a stage before transition to Modern-Chinese. In this study, we tried to use paired speech materials in the Yuan, Ming and Qing eras, and to accurately grasp the phonological system that those materials reflect. In the Edo period of Japan, “Tanghua” was transmitted from China, and many textbooks for teaching Chinese were created. “Tanghua” reflects Chinese language in the Ming and Qing periods, and is useful for researching Modern-Chinese phonological history.

研究分野：漢語音韻史

キーワード：対音資料　近代漢語　音韻史

１．研究開始当初の背景

官話の語音がどこの方言を基礎としたかについて、ここ三十数年来、論争がつづいている。主要な見解として（1）北京音説、（2）中州音（中原音）説、（3）南京音説 がある。（1）がながいあいだ通説としておこなわれてきたが、李新魁 1980 にいたり（2）が提示された。遠藤光暁 1984 は朝鮮資料により明代官話の基礎方言が南京語である可能性にはじめて言及した。魯国堯 1985 は別の論拠により明確な南京音説をうちだした。この後、明代（研究者によっては清代中期まで）の官話について（3）に賛同する論考がふえる。張衛東 1991・2007 や楊福綿 1995、高田時雄 1997、古屋昭弘 1998、内田慶市 2001 などもカトリック宣教師がのこした資料を根拠に（3）である（ただし古屋氏は「南京」の範囲について検討すべきことを注意深く指摘している）。一方、有力な反論もある。張竹梅 2007 は明代初期、南京語は官話の基礎方言となりうる条件を有していなかったという。麦耘・朱暁農 2012 は（3）をまっこうから否定し、（2）を支持している。

研究代表者は 1991 年漢語言国際学術研討会（武漢大学）において、清代後期の官話音は北京音にもとづくむねの発表をおこなった（岩田憲幸 1994）。岩田憲幸 2011a・b ではさらに時代をさかのぼらせ、清初でもそうであった可能性をしめした。いずれも語音資料にもとづく音韻分析からみちびきだされた結論である。江戸から明治初期にかけ日本でおしえられたのは南京官話であり、清代官話も南京語が基準となっていたとする見解がある（張衛東 2007 など）。研究代表者は 2012 年厦門大学での国際会議においてその根拠自体が誤解であることを指摘した。江戸時代、日本で認識されていた「南京」音とは蘇州・杭州・湖州・上海・寧波などに通行していたもので（1786 年序 1834 年刊、原雙桂『過庭紀談』参照）、一都城南京の語音をさすものではなかった（岩田憲幸 2014）。宣教師資料や江戸期にいう「南京」音の実態とはどういうものか、また江戸期その学習が重視された浙江音（杭州音）とはいかなるもので、「南京」音とはどういう関係にあり、どこがどうちがうのか等々、詳細はあきらかでない。研究代表者は 2014 年広西大学での国際会議においてこれらの問題の解明が必要であることを指摘した（岩田憲幸 2017）。

上述のごとく、官話の所拠方言に関する見解は基本的な点においていまだ一致していない。その背景にはこれまでこの問題が歴史的・政治的あるいは文化的・社会的側面から論じられることがおおく（それ自体重要であることはまちがいないが）、言語資料そのものに即した研究が十分ではなかったことがある。官話をふくむ近代漢語の音韻史研究にとってもっとも必要なことは、関係資料について言語学的な観点からの徹底した分析と綿密な考察とをつみかさねることである。

〔文献目録〕

岩田憲幸 1994「清代後期の官話音」、『中国語史の資料と方法』、京都大学人文科学研究所。
岩田憲幸 2011a「清代官話音管見」、『清代民国漢語研究』、（ソウル）学古房。
岩田憲幸 2011b「従清代官話資料看它們所反映的音系問題」、『第十二届国際暨第二十九届全国声韻学研討会論文集』、台湾声韻学学会・中央大学。
岩田憲幸 2014「従日本江戸時代的材料看“南京”、“南京話”問題」、『吉林大学社会科学報』第 2 期。
岩田憲幸 2017「“唐音”在漢語語音史研究上的価値」、『中国音韻学――南寧研討会論文集（2014）』、広西民族出版社。
岩田憲幸 2018「“南京音”和“浙江音”――“唐音”研究――」、龍谷大学『国際社会文化研究所紀要』第 20 号。
内田慶市 2001『近代における東西言語文化接触の研究』、関西大学出版部。
遠藤光暁 1984「『翻訳老乞大・朴通事」里的漢語声調」、『語言学論叢』第 13 輯、商務印書館。
古屋昭弘 1998「明代知識人の言語生活――万暦年間を中心に――」、『現代中国語学への視座――新シノロジー・言語篇』、東方書店。
高田時雄 1997「清代官話の資料について」、『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、東方学会。
張衛東 1991「論『西儒耳目資』的記音性質」、『紀念王力先生九十誕辰文集』、山東教育出版社。
張衛東 2007「論近代漢語官話史下限」、『近代官話語音研究』、語文出版社。
張竹梅 2007「試論明代前期南京話的語言地位」、『近代官話語音研究』、語文出版社。
麦耘・朱暁農 2012「南京方言不是明代官話的基礎」、『語言科学』総第 59 期、科学出版社。
楊福綿 1995「羅明堅、利瑪竇『葡漢詞典』所記録的明代官話」、『中国語言学報』第 5 期、商務印書館。
李新魁 1980「論近代漢語共同語的標準音」、山西省社会科学院『語文研究』第 1 期。
魯国堯 1985「明代官話及其基礎方言問題――読『利瑪竇中国札記』」、『南京大学学報』第 4 期。

２．研究の目的

漢語史研究においてもっとも重要な地位をしめる語音史の研究は、従来、主として韻書・韻

図にたよっておこなわれてきた。だがこれらの資料がつたえるのは音類レベルの情報であり、音価レベルにおける情報をえるには限界がある。本研究は、パスパ文字資料・朝鮮文字資料・唐音資料・欧文資料といった音価レベルの情報を提供する対音資料に対し、共時論・通時論両面から音韻分析をくわえ、その結果を従来の韻書・韻図による研究成果と照合することで、漢語音韻史研究にあらたな局面をひらくことを目的としたものである。本研究が対象とするのは元・明・清期の対音資料・音韻資料であり、各資料ごとにその音韻体系を帰納するとともに、それらを比較・検討することで、相互間の関係や異同について多角的な考察をすすめ、それによって近代漢語の音韻面における史的継承・史的変遷に関しあらたな知見をえようとするものである。

３．研究の方法

（1）資料調査・蒐集　唐音資料、欧文資料を中心に調査・蒐集した。『三字唐話』（著者、成書年とも不明）2 種、『唐韻三字話』（同前）の存在をしり、複写することができた。また欧文資料（複製本）を十数種入手した。例：*DIE NANKING KUANHUA,KARL HEMELIMG,1907*;*ENGLISH & CHINESE VOCABULARY IN THE COURT DIALECT,SAMUELE WELLS WILLIAMS,1844* ; *DIALOGUES CHINOIS-LATINS,PAUL HUBERT PERNY*;*SYLLABAR DES NANKING-DIALECTES,FRANZ KUEHNERT,1898*。関係資料として八十韻本『洪武正韻』等を入手することができた。

（2）字音データの入力　対音資料所載の漢字（通常、数千から数万）につき、その字音データを１字ずつパソコンに入力する作業をすすめた。その際、声母・韻母・声調の別をもとに分類した。

（3）音韻分析データの作成　(2)にもとづき ①「声韻調結合表」、②「同音字表」、③「中古音との対照表」、④「字音索引」を作成する作業をすすめた。同一様式の各種データ表を集積することにより、各資料が反映する音韻体系上の異同や問題点が容易かつ正確に把握できることを期した。

４．研究成果

（1）日本語の音節は漢語にくらべその構造が単純であり、日本語音で漢語音を再現することには限界がある。研究代表者はこのことを指摘したうえで、唐音のもつ資料的価値について論じたことがある（岩田憲幸 2017）。以下の例は特定の字種の韻母について各資料の音声表記をしめしたものである（「唐」については字音をそのまましるす）。なお「蒙」「洪」「西」「唐」「M」「普」は、それぞれ『蒙古字韻』(1308)、『洪武正韻訳訓』(1455)、『西儒耳目資』(1626)、『清俗紀聞』(1799)、*An English and Chinese Pocket Dictionary, in the Mandarin Dialect*（1893)、「普通話」（現代漢語共通語）の略である。『清俗紀聞』は唐音の一資料としてあげたまでである。

	例字	蒙	洪	西	唐	M	普
1)	聖	ing	ing	im	シン	ing	eng
	升	ing	ing	im	シン	ing	eng
	神	in	in	in	ジン	ǎn	en
	針	im	im	in	チン	ǎn	en
2)	川	ǔen	jujən	uen	チエン	wen	uan
3)	口	hiw	ɯu	eu	ケ◯ウ	eu	ou
	瘦	hiw	ɯu	eu	スエ◯ウ	未収	ou

資料ごとの性質や時代のへだたりにもかかわらず、「蒙」から「M」までのあいだにはあきらかな系統性がみられる。1)の例では梗・曽・臻・深摂開口三等韻知章組字が「M」まで拗介音 i を保持していたことを、2)では山摂合口三等韻知章組字の主母音がやはり「M」まで中高母音であったことを、3)では流摂開口一等韻字及び三等韻荘組字の主母音が「唐」までは（おそらくは「M」まで）中高母音であったことをしめす。ここに漢語語音の史的均質性・継承性をみてとることができる。この例においては唐音のもつ信憑性も確認することができる。

（２）唐音（厳密には近世唐音）とは漢語音の主として江戸期における日本での総称であり、官話音、杭州音（浙江音とも）、福州音、漳州音などをふくむ。ただし資料としてのこされているのはほとんどが杭州音および官話音（いわゆる南京官話音）である。岩田憲幸 2018 は朝岡春睡『四書唐音辨』(1722）により、同書のいう「南京音」と「浙江音」とがそれぞれどのような音系であり、両者のあいだにどのようなちがいがあるのかを考察したものである。結論の一部を単純化していえば、「南京音」と「浙江音」とでは声母について明白な差がみられるものの（「浙江音」は中古全濁声母を保存する）、韻母はほとんどかわらないことがあきらかとなった。すなわち両者の音系におおきな差異はないことになる。上掲論文はこれをいかに解釈すべきかについていくつかの可能性について論じた。「南京音」、「浙江音」が具体的にどの地域の方言を反映したものなのかという問題は今後の課題としてのこされている

今次の研究において『三字唐話』、『唐音三字話』、劉道『唐詩選唐音』(1777）等の資料を検討する過程で、一見大差がみられないような唐音資料ではあるが、仔細に点検するとあらたな課題がみつかるかもしれないと感じた。たとえば中古合口呼の保存・消失における資料間でのちがいなどである。唐音資料では一般に牙喉音声母では中古合口を保存するが、舌歯音声母では開口に転じ、合口を保存することはないとおもっていたが、かならずしもそうではないかも

しれない。今後この点を精査して確認する必要がある。
　矢放昭文 2017（「５．主な発表論文等」の項目に掲出）は、島津重豪『南山考講記』（1767）にみられる「地：リイ」、「甜：テン」という一種特異な唐音表記をめぐって、漢語方言とむすびつけ、また日本語方言と関連させて論じており、言語学、方言研究の観点からみて興味ぶかい。この稿本はのちに『南山俗語考』（1812）として刊行されるが、そこでは「地」は「テ〇イ」または「デイ」に、「甜」は「テヱン」または「デヱン」と校訂者によってあらためられたことが指摘されている。『南山俗語考』はすぐれた唐音の教本としてしられるが、その成書にあたってながい時間と多大な労力とをついやし校訂作業をおこなったことがうかがえる。
（3）Nicolas Trigault（金尼閣）『西儒耳目資』（1626）はそれによって当時の漢語の音韻体系の実態をしることができる貴重な資料である。同書には当時の漢語音のすべての音節が掲出されており、それらを整理・統合することにより、同書の反映する音韻体系を構築することが可能なはずである。『西儒耳目資』はどのような方言に依拠したのか、『西儒耳目資』には大量の異読音が収載されているが、それはなににもとづくのか、異読音がしめすのはどういうことか等々、今回『西儒耳目資』の研究にひときわ尽力した。研究成果の一端をしめせば以下のとおりである。
　①『西儒耳目資』はひとつのまとまった語音体系を反映する。それは音韻構造から判断して北方方言、すなわち当時の官話音系である。ただし単一・純粋なものではなく、官話音系内での方言音を異音として併載する。
　②『西儒耳目資』の反映する音系は『中原音韻』のそれと同系統である。ただし両者は直接的な継承関係にはない。
　③『西儒耳目資』が収録する異読音のうち、一部は官話音系内部における方言音である。
　④『西儒耳目資』が収録する異読音には当時実際には通行していないものがふくまれている。『西儒耳目資』は『洪武正韻』を主とし、『古今韻会挙要』を従として、選字・標音作業をおこなっており、旧韻書での音韻地位にしたがい当時の北方音をふったため実際にあわない字音が出来した。
　⑤『西儒耳目資』が収録する字音には『洪武正韻』によってもたらされたとおもわれるあやまりがある。

　以上、一連の研究成果が近代漢語音韻史研究進展の一助となりうることを信ずる。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計４件）
　①矢放昭文、『南山考講記』の「地、甜」音、京都産業大学日本文化研究所紀要、査読無、第22号、2017、346（11）-335（22）
　②岩田憲幸、“唐音”在漢語語音史研究上的価値、中国音韻学――南寧研討会論文集（2014）（広西民族出版社）、査読有、2017、53-60
　③岩田憲幸、『西儒耳目資』音系及異読音、中国音韻学研究 第二十届国際学術研討会（西安）会議論文集（陝西師範大学文学院・人文社会科学高等研究院）、査読無、2018、592-610
　④岩田憲幸、再論『西儒耳目資』音系的性質問題、葉宝奎教授寿慶文集（厦門大学出版社）、査読無、2019（予定）
〔学会発表〕（計２件）
　①岩田憲幸、従另一角度看『西儒耳目資』音系問題（稿）、首届国学（漢学）教育国際学術研討会（南陽師範学院）、2017
　②岩田憲幸、『西儒耳目資』音系――與『中原音韻』音系的比較（稿）、中国音韻学暨唐作藩教授九秩華誕学術研討会（江蘇師範大学）、2017

６．研究組織
(1)研究分担者
①研究分担者氏名：矢放 昭文
ローマ字氏名：(YAHANASHI,akihumi)
所属研究機関名：大阪大学
部局名：言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）
職名：招へい研究員
研究者番号（8桁）：20140973
②研究分担者氏名：森 博達
ローマ字氏名：(MORI,hiromichi)
所属研究機関名：京都産業大学
部局名：外国語学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：90131292
③研究分担者氏名：許 秀美
ローマ字氏名：(KYO,sumi)

所属研究機関名：龍谷大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：50612826
④研究分担者氏名：澤田 達也
ローマ字氏名：（SAWADA,tatsuya）
所属研究機関名：大阪大学
部局名：言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）
職名：招へい研究員
研究者番号（8 桁）：20647599

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。